

## 〔野菜〕

### 1. 概況

平成19年は、1～3月の平均気温が高く、2～3月の日照時間も多かった。4～6月の気温は平年値であったが降水量が少なく、特に6月は平年の1/3程度と少雨であった。逆に、7月に入ると降水量が多かった。8月～10月は気温が高く経過し、高温による果菜類の着果不良や、葉菜類の発芽不良などが発生した。11～1月も気温は高く経過し、降水量は少なかった。逆に2月の気温は低く経過した。沖縄では、秋季の長雨で定植が遅れた。また、2月下旬からの低温で、果菜類で肥大不良などが発生した。

### 2. 果菜類

#### 1) 促成イチゴ（福岡、佐賀、長崎、大分、熊本、鹿児島）

品種動向：福岡は「あまおう」、佐賀は「さがほのか」となり、他県でも、「とよのか」にかわり、「さがほのか」が増加している。「さちのか」は長崎で多く、熊本では「ひのしずく」が増加している。新品種に対する期待は相変わらず大きい。

平成18年度産：育苗期に炭そ病の多発した。高温の影響で、1月～2月下旬まで出荷量が減少し、3月～4月に出荷が集中した。

平成19年度産：育苗期は降雨量が少く炭そ病の発生は少なかったが、萎黄病が発生した。普通作型での花芽分化が9月の高温で遅れ、定植後の高温乾燥により活着不良の発生もみられた。頂果房の出蕾開花の遅れにより、収穫開始が遅くなった。乾燥気味でハダニの発生が多かった。カブリダニ類の天敵利用が拡大している。

#### 2) トマト

冬春栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、沖縄）：促成栽培では「ハウス桃太郎」「桃太郎はるか」「感激73」等、品種が多様化している。8～9月定植で高温による着果不良や青枯れ病が発生した。また、重油価格高騰による低夜温管理で一部に収量の低下がみられる。

夏秋栽培（大分）：桃太郎「夏美」が増加した。養液土耕栽培に取り組む農家も増えているが、隔離床を導入する農家も増えつつある。「黄化えそ病」が一部で発生した。

トマト黄化葉巻病：本病の発生は多いが、防虫ネットや紫外線カットフィルムの展張、薬剤防除等の徹底により被害は軽減している。沖縄でも黄化葉巻病が多く市の町村で確認されているが、防除対策の取り組みにより被害は軽減しつつある。

#### 3) ナス

促成栽培（福岡、佐賀、熊本）：「筑陽」の接木栽培（台木品種「トナシム」、「赤ナス」「トレロ」等）が行われている。平成18年度産は、前年12月～1月上旬の曇天により1月出荷量少なかったが、2月以降は好天に恵まれ出荷量は増加した。3月～4月は低夜温の影響で果実肥大は遅延したが、5月～6月中旬は順調に出荷が続いた。6月下旬以降は高温の影響で品質が低下した。単位収穫量は昨年並であった。平成19年度産は、定植は順調に行われたが、高温の影響で青枯れの発生圃場が多かった。また、コナジラミやヤガ類、アザミウマ類の発生も多かった。11月は寡日照のため出荷量は少なかったが、12月は気温が高く推移したため順調な出荷となった。2月は低温、日照不足の影響で出荷量が減少した。

#### 4) ピーマン

促成栽培（宮崎、鹿児島）：平成18年度産は、1～3月は気温が高めで、4月以降は低めで推移した。日照時間は期間を通して平年よりも多かった。出荷は1～3月がやや多く、4～5月が平年より少なかった。出荷量は前年度とほぼ同等であった。平成19年度産は台風の襲来もなく、また、高温乾燥で推移したものの生育は順調であった。年内の収量も平年よりも多かった。

夏秋栽培（大分）：ハウス栽培は「さらら」、露地栽培は「みおぎ」である。かん水施肥栽培が普及している。定植後の低温で初期生育が抑制され、梅雨期の低温・寡日照により落花が多く初期収量が低下した。その後は高温と好天が続き、生育が促進され着果が多くなった。なお、尻腐れ果は多発した。

#### 5) キュウリ

促成栽培（福岡、熊本、宮崎）：主力品種は「ハイグリーン」、「グリーンラックス」、「久輝Ⅲ」である。病害虫の発生が多く、0.4mm目合いの防虫ネットを設置するハウスが増えてきている。黄化えそ病が発生している。整枝法はほとんどが子または孫づるを1株から6本程度放任するつる下ろし整枝法である。台風も少なく出荷量はやや多めであった。重油価格高騰による低温管理で、時期別の収穫量の変動が大きくなっている。

抑制栽培（佐賀、福岡、宮崎）：主力品種は「エクセレント353」、「プロジェクトX」である。整枝法は有効生長点を5～6本確保しながら、それ以外のつるを摘心する摘心整枝法である。10～11月に褐斑病が一部で発生した。

#### 6) スイカ（熊本）

春夏作は暖冬で生育が良く、果実の肥大も良く3月～4月の出荷量は増加した。4月の低温の影響で5月の出荷量はやや減少した。なお、作付面積は徐々に減少傾向であるが、小玉スイカは増加傾向である。

#### 7) メロン（熊本）

春夏作は暖冬で生育が良く、前進化傾向で果実肥大及び品質は良く、3月～4月の出荷量は多かった。5月～6月出荷も前年比並であった。

秋冬作は天候に恵まれ、一部で退緑黄化病の発生が見られたが、11月の出荷量は前年比の162%と多かった。

#### 8) カボチャ（鹿児島、沖縄）

春栽培は、「えびす」「くりゆたか」が多い。初期生育は順調で、4月に晩霜被害を受けたが生育は順調に推移し、5月が天候に恵まれ大玉傾向となった。秋栽培は、台風はなかったが、10月上旬までの高温・干ばつにより小玉傾向であった。

#### 9) ニガウリ

促成栽培の定植は長雨で遅れ、これに加えて低温の影響で生産量は低下した（沖縄）。平成10年より、イチゴの後作として施設ニガウリが導入され、品種は「えらぶ」である。支柱ネット栽培（4本仕立て）が主体である（長崎）。

#### 10) トウガン（沖縄）

低温で生育停滞が見られたが、大きな影響はなかった。品質は例年どおりであった。

#### 11) インゲン

品種は「サーベル」、「スーパライト」、「ステイヤー」等である。平成18年産は、前年度の台風の影響を大きく受けたが、暖冬だったため長期収穫となり、平年作まで回復した。平成19年産の抑制インゲンは、は種は順調であったが、高温・干ばつにより規格外品が多い産地があった（長崎）。植え付けの遅れや低温の影響もあり、一部に品質低下が見られた（沖縄）。

#### 12) ソラマメ（長崎、鹿児島）

品種は、「陵西一寸」、「ハウス陵西」で、現行のU字四本仕立から、L字三本仕立てによる省力栽培が増加中である。これまで五島や島原半島及び平戸を中心に産地が拡大してきたが、近年は面積が減少傾向である。10月上旬まで高温・干ばつにより、生育は遅れ、炭疽病やヨトウムシ等の発生が多かった。11～12月も高温・干ばつにより、下節位の着莢が少なく年内の出荷量は少なかった。

### 3. 葉根菜類

#### 1) アスパラガス（佐賀、長崎、福岡、大分）

品種は「ウエルカム」で、前年の台風の影響でダメージを受けた株が多く、春芽の収量は前年の9割程度であった。早めの立茎開始と天候に恵まれ、親茎の生育は順調で6月の収量は多かった。7月以降の高温により、若茎の生育異常が発生し、商品化率が著しく低下したが、その後は大きな台風被害もなく平年作であった。なお、長崎では夏芽の減収が大きく、総収量も減少した。新規増設ハウスを中心に紫外線カットフィルムやフルオープンハ

ウスが増加している。病害では斑点性病害、茎枯病が地域によっては多発している。害虫では2～3年前よりタバココナジラミが発生している。

## 2) ネギ

小ネギ（福岡、大分）：周年用品種として「鴨頭」、夏用として「夏彦」、冬用として「冬彦」が主に用いられ、F1品種の普及により収量、品質が安定するようになった。夏季は生育が不安定で、発芽不良や軟弱徒長による葉焼けなどが発生した。難防除害虫のハモグリバエ、スリップスに対してはUVCフィルムの被覆により施設内への顕著な侵入抑制効果がみられ普及し始めている。

白ネギ（大分）：品種は従来の固定種に加えてF1品種の利用が拡大している。適地（適標高地）への出作栽培が拡大している。作柄は、平坦地域、中間地～高標高地域とも全般的に良好であった。

## 3) タマネギ（佐賀、長崎）

平成19年産は大玉となったが豊作で、単価は低迷した。平成19年産作付け、前年の反省を踏まえ、極早生・中生の作付面積をやや少なくした。苗の生育は良好で、定植も11月の少雨により順調であった。なお、2月の低温により生育は遅れている。全自動のマルチ無マルチ兼用の定植機が平成19年度より導入されている。

## 4) ニラ（大分）

品種は「スーパーグリーン」が主体である。各産地でセル成型苗の利用やそれを用いた機械定植が検討されている。夏ニラでは白絹病等が、冬ニラでは乾腐病、さび病、白斑葉枯れ病等が認められ、「ニラえそ条斑病」も拡大傾向にある。

## 5) ブロッコリー

露地野菜として、県北地域、五島、壱岐でブロッコリーが増加している。高温・干ばつにより虫害及び異常花蕾が発生した（長崎）。1月以降気温が高く推移し生育が早まった。19年度作付けでは、年内は定植後の乾燥で生育が遅れ小玉傾向であった。病虫害は、根こぶ病の発生が、ハスモンヨトウ、アオムシの被害が多かった（福岡）。

## 6) レタス（福岡、宮崎）

暖冬傾向により前進化した生育が続いた。8月～9月の高温により、播種作業を遅く実施した。定植後は乾燥傾向が続いたため、生育がやや遅れ、ハスモンヨトウ等の発生が多かった。

## 7) ニンジン（長崎、沖縄）

品種構成は、敬紅39%、愛紅29%、向陽24%である。平成19年産は7月下旬～9月上旬まで播種が続いたが、播種期の高温・干ばつで発芽不良が一部見られた。その後、11月まで干ばつが続き、昨年に続き不作であった（長崎）。今年は台風もなく、まき直しや発芽不良が少なく、生育は順調であった（沖縄）。

## 8) ゴボウ（福岡）

新ゴボウ（生育の全期間を通じて枯れ葉の発生がなく、葉柄部を3cm程度付けて出荷するゴボウ）が生産されている。主力出荷時期はトンネル被覆による10月下旬～12月上旬播種、3月下旬～6月上旬収穫の作型である。

## 9) バレイショ

平成19年春作バレイショは、年内～1月の植え付けは天候もよく、適期に収穫を終えた。2月の発芽期以降は一部降霜の被害を受けたが、3月下旬に十分な降雨があり、日照時間も多く豊作であった。秋作バレイショは、植え付け期の9月に記録的高温で発芽不良をきたして生育の遅れや欠株が生じ、その後は干ばつ続きで不作であった（長崎）。1月下旬から3月上旬の低温の影響で、奄美地区や県本土とも生育遅れでやや小玉傾向であった。また、奄美地区では風雨の影響もあり茎葉損傷や疫病が発生した（鹿児島）。

## 10) 食用かんしょ（沖縄）

紅いもを中心に面積は増えつつある。作柄は安定していた。